

「江戸の遺伝子」 徳川恒孝著 PHP研究所発行

徳川恒孝（とくがわ つねたか）

1940年生まれ。徳川宗家第18代当主（1963年より）学習院大学政経学部政治学科卒業。日本郵船副社長を経て顧問。財団法人徳川記念財団理事長。社団法人横浜港振興協会会長、WWF世界自然保護基金ジャパン常任理事、社団法人東京慈恵会会長、財団法人斯文会名誉会長。

序にかえて

私は1971年から75年まで、日本郵船ニューヨーク支店に勤務して居ました。丁度その頃、ニューヨーク航路がコンテナ船に替わる時期であり、又、米国東海岸で港湾労働組合が大ストライキを起こしていたりしました。ある日、上司から「ジャパン・ソサエティのパーティに出席せよ」という命令を受け出席しました。その席で、かなりのご年配の米国人紳士から、私の胸に付けた「トクガワ」という名札を見て大変驚かれ、どのトクガワか？両親の名は？など質問攻めに遭いました。私が徳川宗家18代であることが分かると、私の手をしっかりと握って離さず「私は世界の歴史の中で徳川家康公が最も素晴らしい指導者だと確信し尊敬している。現在の日本人が狸親父などと呼んで正しく評価しないのは残念である。どの国でも3世紀に渡って平和を維持し、その国の基本の文化を創ったならば「国父」として街に銅像を建てるであろう。そして私に、この偉大な人物に対する正しい評価を広めるよう努力して欲しい」と言われた。後で考えると、コロンビア大学かハーバード大学の日本研究の先生であろうと思いましたが、その時はお名前もうかがわず又再びお会いする事も有りませんでした。私は昭和39年に大学を卒業するまでずっと学習院に在学したのですが、大学時代2年間英国に住みました。特に学習院高等科の歴史の先生方は素晴らしい方々でした。しかし世界史の中での日本史との関係を教えて頂いていればと今は残念に思っています。

第一章 江戸時代とは何だったのか？

歴史と言うものは全く不思議なもので、その対象となる時代そのものではなくて、その時代を歴史として見る時代の人達の考えによって造られ語られるものです。現代の我々が生きているこの社会を、300年後の歴史学者がどう評価するかは全く分からない。「自然環境が悪化し、人口の減少と共に社会が乱れ、子が親を殺し、親は子を殺す悲惨な時代であった」と書かれるか「平和を維持し、化石燃料を大量に消費する事によって繁栄し、日本史上最も華やかな（1）」

時代であった」となるかは全て後代の人々の見方と考え方に委ねられています。明治この方、江戸時代は基本的に圧政と退嬰の時代として扱われてきました。新しい体制がそれまでの体制を絶賛することはまずないことですから評価が悪くなるのは当然です。又、戦後はマルクス史観によって、最後の封建制であった江戸時代が、最後の最悪の遺物として扱われました。1980年代になって、ようやくマルクス史観から離れて、日本の歴史と社会制度や当時の人々の生活や実態を研究しようとする方向が大きくなるとして出て来ました。最近では、近世としての江戸時代と明治以降の近代としての日本を一つのブロックとして、戦国時代以前と分けて区分する見方も出ています。西欧の歴史学者は、江戸時代を「バスク・トクガワーナ」と呼んでいます。長崎と江戸を二往復したケンペルによって描かれた江戸時代の日本は「この国の民は習俗、道徳、技芸、立ち振る舞いの点で、世界のどの国にも立ち勝り、国内交易は繁盛し、肥沃な田畑に恵まれ、強靱な肉体と豪胆な気性を持ち、生活必需品は豊富であり、不断の平和が続き、世界でもまれに見るほどの幸福な国民である」と書いています。この時代のヨーロッパは、ルイ 14 世がヴェルサイユ宮殿を建てた時代です。一方 2 世紀近くにわたる宗教戦争によって、人口は減少し、魔女裁判が全盛の時代でした。魔女裁判で火あぶりになった人の 8 割が女性で、その数数十万人と言われています。つまり江戸時代の初めの 100 年に当たる 17 世紀の世界は決して輝かしいものではありませんでした。

日本に詳しい外国人の国際政治学者の先生から「当時の世界情勢の中で、ベストのタイミングで鎖国をし、二百数十年経ってギリギリのタイミングで開国に踏み切った政府の国際情勢に対する判断は正に絶妙であった」と言われたことがあります。西欧列強がどのように諸国を植民地化して行ったのか？スペインにしても英国にしても真っ向から戦って征服したのではありません。対象国の内部分裂・対立を助長して、その内乱に付け込んで資金や軍事援助を行い、対価として色々な権益を獲得し、支配を広げていったのです。日本にもこの危険性がありました。大阪冬・夏の陣、島原の乱の時も、幕府が一番神経を立てたのは、強大なスペイン海軍の介入だったのです。幕末になって、英国が薩摩藩に、フランスが徳川幕府を支持しましたが、この時、巨額な軍事資金借入れや軍事援助を受けていたら、その後の日本の形は異なったものになっていたでしょう。又、エール大学の先生から「最後の将軍は政権を譲り渡す前に、当然天皇家と何か特別な取引（ディール）をしたはずだ。そのディールを知らなかった会津や東北の藩が戦ったのだと思います。それがどんなディールであったか、是非教えて下さい」と質問され、お答えするのに苦労しましたが、御納得していただけませんでした。

当時のヨーロッパは東洋からの香料の輸入が長く途絶えて大変困っていました。東洋と西洋を結ぶ交易路を支配して来たイスラム諸国が 11 世紀に始まった十字軍以来、繰り返されるキリスト教諸国の侵入に辟易して交易路を閉ざしていたからです。そこで外洋に面したスペインとポルトガルが新しい交易路を開拓すべく乗り出します。スペイン王の援助を受けたコロンブス（イタリア・ジェノバ出身）は大西洋を真っ直ぐ西に向かって、現在のカリブ諸島を発見します。それをアジアの一部と確信し「インディオス」（東洋のインド）に至った事をスペイン国王に報告します。一方ポルトガルは、その 4 年前の 1488 年に、アフリカ大陸喜望峰を越えてインドに至る航路を発見して居ました。バスコダ・ガマの航路です。スペインは「インディオス」に到着できる最短航路を発見したと信じ、これを独占すべく、時の教皇アレキサンドル六世（スペイン出身）を口説き、彼の仲介であの有名な「トリデシヤス協定」を発効させます。この協定は、大西洋の中間で南北に線を引き、その西側（アメリカ側）はスペインの権益、東側（アフリカ大陸側）はポルトガルの権益と決めました。権益と言うのは、その域内の遠洋海路独占と、非キリスト教の地域は勝手に征服して領土としてよろしいと言う事です。この線が南米大陸の出っ張った南の部分にかかっていたので、その部分はポルトガル領ブラジルになったのです。それ以外は全てスペイン領となったのです。そしてスペインは、メキシコで栄えたアステカ文明と南米ペルーを中心として栄えたインカ文明を滅亡させ、巨大な銀鉱を発見（メキシコ銀鉱、ボリビア銀鉱）、この巨大な富がスペイン帝国の繁栄を、17 世紀を通じて支えたのです。最初にポルトガルが東洋にやって来て、日本に現れたのは、この様な事情があったのです。東洋進出に出遅れたスペインは、1520 年マゼラン艦隊が南米大陸南端を回ってようやく太平洋に進出し、1525 年マニラにアジアの本拠地を構えます。スペインによるフィリピン諸島の統治はこの時から始まります。その後、ポルトガル国王は北アフリカで戦死し、スペイン国王フェリペ 2 世が継ぎ、1 人の王が 2 つの王国の王になります。その頃から、キリスト教の新教国であるイギリスとオランダが遠洋航海に進出し、スペインとポルトガルと争うようになります。

第三章 家康公の時代

では「神君」家康は、その後の将軍たちにどのように理解されていたのでしょうか。八代将軍吉宗に向かって「旗本たちが代々伝えし甲冑、武具を質屋に預け置くのは言語道断だ」と言う人あり。吉宗それを聞いて「東照公、誠に弓や太刀が町人の土蔵に預かり置かれると聞いて、さぞお喜びになるであろう」と言った。又、最後の将軍慶喜が鳥羽伏見の敗戦後、大坂を脱出し江戸に帰った時、天璋院、静寛院宮から朝敵の汚名を被り、幕軍を捨てて逃げ帰った（3）

事を叱責されると、慶喜は、自分は東照神君なれば如何に遊ばされたかを真剣に考えた。今、日本を二つに分けて戦乱の世となす事は、神君のお考えとは思えないと弁明したと言われています。つまり幕府の基本判断は家康の考えを付度してなされたと言う事です。家康が言った言葉に「人倫の道、明らかならざるより、自ら世も乱れ、国も治まらずして、騒乱止むなし。この道理を論し知らんとなれば、書籍より外なし。書籍を刊行し世に伝へんは仁政の第一也」というのがあります。家康は活字印刷による本の出版を始めました。京の僧で足利学校の学頭であった元結に命じ、十万余の木活字を作り「貞観政要」「六韜」「三略」などを刊行しました。この時出された本を伏見版と言います。更に大御所として駿府に移った後に、今度は銅活字を十万強鋳させ、林羅山などを中心に活字印刷本の刊行を続けます。これを駿府版と言います。銅活字本の作成には朝鮮から過って連れてこられた技術者の力が大きく働いていました。活字本刊行は京都を中心に儒書、史書、仏教、医学書などの出版が民間の本屋によって盛んになりました。これは武士が行政官としての高い教養を求められて来たからです。元禄時代に年間四千点の出版物が世に出るにつれ、仮名交じり本や絵入りの本が多数を占め、版木印刷が再び主流になります。そしてこの百年間で社会全体の識字率を爆発的に向上させたのです。

第四章 最初の百年でつくられた江戸時代のかたち

日本は昔から次々と外国の文明を輸入し吸収して使って来ましたが、江戸時代は全く日本人の知恵と感性で作りました。その結果、日本の歴史の中で最も長く豊かで平和な社会を創り出したこととなります。もしも、明治から幕府が始まったと仮定すると、現在は八代将軍吉宗の時代に当たり、まだそれしか経っていないのです。つまり、江戸時代の中に詰まっている日本人の知恵と感性は、今でも私達の中にしっかり残っている事を申し上げたいのです。

文禄・慶長の頃、日本の人口は約 1200 万人、百年後の元禄の時代には約 3000 万人と推定されています。百年で 2.5 倍に急増したのです。世界では医学が進んできた 18 世紀後半から人口が急増しましたが、日本では 17 世紀に爆発的に人口が伸びています。こんな国は世界中に有りません。平和と豊かさのお蔭です。そして、河川の治水が進んで新田開発が進んだことが、人口爆発の主因の一つでした。コメの生産量が 1200 万石から 3000 万石と 2.5 倍になったのです。江戸時代の末期のコメの生産性は、1 ヘクタール当たり 2.53 トンと他のアジアの国、インド、フィリピン、インドネシアに比べ、約 2 倍の生産性がありました。江戸時代に入って百年目の 1700 年の江戸の人口は約 100 万人です。武家が 50 万人、それ以外の人々が 50 万人です。江戸は当時、世界最大の都市でした。ロンドンとパリはこの時点で、まだ 50 万人～60 万人だったと (4)

推定されています。北京はよく分らないのですが、明から清に国が代わった頃でもあり、まだ百万人にはなっていなかったと思われます。そして約 **260** の大名が居たわけですから、全国に 260 余りの町・都市が出来ました。 17 世紀～18 世紀にかけて日本は世界で最も充実した都市文明を持っていたことになります。これ等の都市を結ぶ街道も整備されました。関所は全て幕府直轄で通行税は一切ありませんでした。庶民の通行には道中手形（パスポート）と関所手形（ビザ）が必要でした。これは住んでいた所の名主と菩提樹の和尚さんが出すのが普通でした。因みに、欧州では領の境界を通過する度に通行税や荷物への関税が課徴されていました。庶民は原則として自分の住む領地から一生外に出ることはありませんでした。 江戸時代には四回にわたる爆発的な「お伊勢参り」の流行があり、約 **60** 年ごとに突発的に起こっています。特に **1830** 年の四回目は、人口の **15.6%** が参詣したのです。その理由はよく分っていません。もう一つの街道の旅に参勤交代があります。大名が隔年に、江戸に滞在する正室と嫡男を置いて、出府する制度を言います。又、江戸屋敷の維持に莫大な費用が掛かりました。松江藩の記録によると、天保 **11** 年（**1840** 年）で、藩の総支出の **34%** を占めていました。これが「お国元」と「江戸家老」との対立を生みました。北から南まで武士と若者たちを巻き込んだ官費による長い旅と江戸滞在の制度が二百数十年続いたことは、世間を知り、見聞を広め、他国の若者と仲良くなることによって、日本の文化を創ったとも言えます。つまり、加賀人とか熊本人であると同時に、日本人である事に目覚めて行ったのです。 こんなことをした国は世界中で日本だけです。この百年で人口が **2000** 万人から百万人に増えた江戸の大問題は、良質な水を市街地に供給する事でした。 最初に造られたのが神田上水で、これは現在の井の頭公園から **66** km の上水路を建設し、途中から地下に木管のパイプで市街地に給水しました。その副水路は **3662** もありました。その後、神田上水だけではカバーできず、玉川上水が完成します。（**1654** 年）延長 **80** km の大工事でした。17 世紀～18 世紀を通じて江戸は、世界で最も進んだ衛生管理を維持した町でした。江戸市民は大川（隅田川）で白魚の「おどり」を食べていました。

第五章 華やぐ江戸文化

江戸時代の政府は小さな政府でした。武家の人口は総人口の約 **5%**～**7%** で推移しています。しかし、人件費圧縮政策によって実際に行政、司法、警備などで働いている武士階級は、人口の **2%**～**4%** だった と思われます。百万都市江戸を治める江戸町奉行所の定員は **300** 人弱で、この人数で現在の都庁と各区役所、警視庁、消防庁、東京高裁、地裁の仕事までこなしていました。これでは行政事務が出来るはずがありません。実務部分の多くは民間に委託されました。（5）

又、江戸時代 265 年間を通じ、大名たちは一切幕府に上納する税はありませんでした。その代り、幕府から各大名に対する援助も、飢饉や大凶作の時以外原則ナシです。しかし大名は「役」を行わねばなりませんでした。幕府の要職（若年寄など）の費用、河川の改修、橋の架け替えなどです。幕府も各藩も基本的にコメの年貢だけに頼る収入で、年々拡大する経済に対応するため、年々財政上の困難は増加する一方でした。今風に言えば、GDP が年々増加するのに、世に出回る通貨が一定だったと言う事です。藩の財政悪化と高い民間委託度は村や町の自治能力を向上させ、子弟に対する教育の強化をもたらしました。農村の年貢徴収は、村単位で行なわれ、実務は村役人である名主や庄屋が代行しました。村全体で年貢を納める「村請け制」でした。水利の調整、新田の開発、土地所有権の争い、入会権の調整、分家の成立なども村役人であった村人の合議制で解決して来ました。季節の出稼ぎや野菜の栽培による現金収入は年貢の対象外でした。街の行政も同じく、実質、町役人（ちょうやくにん）が行ないました。これは名主たち町民の役人です。町役人（まちやくにん）と呼ぶと町奉行所の武士の役人のことを指します。江戸と大坂の二つの幕府直轄都市は、年貢が免除されていましたが、町を維持する費用は、町に住む全員で負担しました。課徴された「町入用」は、町屋が面している「通り」の質と長さによって課徴されていました。この為、実質的行政を任された村役人、町役人の事務所では、高い計算能力と書類作成能力が求められ、有能な人材が多数必要で、その育成が不可欠でした。この事が、武士以外の人材の教育の必要性が求められ、日本の識字率向上に繋がりました。又、財政悪化対策として各藩内の殖産に必死の努力が注がれました。

経済力は低いけど教育水準が高い知識階級であり、特殊な道德観念に従う武士階級が、社会の上部構造を作り、その下に洗練された経済・社会があるという、日本の当時の社会構造は真にユニークなものです。このユニークさの一つに「武士は土地を所有しなかった」事が挙げられあす。「土地は公儀のもの。百姓は公儀の百姓」という考えが戦国時代からあったものです。日本人は武家であろうと農民であろうと、すべてその「公儀」の一員として「役」を平等に果たす義務がある。その意味では全く平等であったのです。こうした「役」を人々の代表として果たす人が「役人」です。だから役人は町人でも農民でもよかったです。武士の職分は「人倫の道の保持」にあるとしたのです。利益追求だけが社会のルールでは無い世界を作って行ったことが、江戸時代を一つの特異な文明社会として輝くものとしていたのだと思います。まさに論語の「君子は義に論り、小人は利に論る」です。武士たちへの教育の基本は、知識教育では無く、人格教育でした。立派な人格をつくる教育は、幼いうちから徹底的に教えなければ身に付かないと考えられていたのです。

第六章 日本の宗教 (省略する)

第七章 世界の中の日本と江戸の遺伝子

サンフランシスコの国際線待合室で乗り継ぎの時間、売店を見て歩いていた時、ある時計店で、ベテランの女店員が新人に仕事を教えていたのを見かけた。「ここは旅行者がお客だから充分気を付けなさい。JAL と ANA のボーイングパスの人は大丈夫、盗んだりしません。〇〇〇が一番危ない」と教えていた。

ニューヨークのよくパーティを依頼するホテルの支配人に聞いた話では「日本人はベストの客。部屋をきれいに使い、物を盗まず、夜中まで大騒ぎする事もないし、踏み倒す事もない。最高のお客です。」と言っていた。日本では電車や列車はすべてスケジュール通りに走り、自動販売機が全て正しく動作し、街は清潔です。夜中に女性が一人で歩いても安全です。この様な都市は世界でも滅多にありません。この理由は全ての人々が同じ言葉を読み書き話し、高い教育水準を保ち、基本的に平等であると感じ、同じ文化を深く共有して来たからだと思っています。私は外務省の要請で、パキスタンとバングラデッシュに江戸時代の話をしに行ったことがあります。講演の後の懇談会でこの国々の学者や経済人とお話ししたのですが、両国共、旧英国の植民地ですから英語が話せません。富裕層の子弟は、英国や米国へ高校から留学し、すっかりアングロサクソン化して帰国します。そして MBA 風の経済活動を始めると、伝統的なイスラム共同社会は崩壊してしまいます。それがテロなどの社会不安を起こす原因だと言うのです。どうして日本は、日本の伝統を明治以降も継承できたのか？と真剣に聞いてきます。私は「日本が西欧化を始めた時と現在ではスピードが違う。我々には新たな価値を再生する時間的余裕があった。」と言うのが精いっぱいでした。アドバイスとして「とにかく教育制度を充実させてください。特に初等教育を重視して下さい」とお話ししました。両国とも識字率は 50%前後ぐらいです。

私は日本郵船時代に多くの外国人たちを部下として使って来ました。ケチな国民性の人に接待パーティをやらせ、楽天的な国民性の人に財務を見させると、まずはロクなことにならないという経験をしました。親しい英国人とドイツ人にその話をすると「それはアメリカン・マネージメントの常識です。だがそれを口にするのは止めた方がいい」と警告してくれました。最も国民性の「らしさ」を保っているのは日本人で「真面目で静かで威張らない。協調的で自分のことよりチームワークを重視する。悪いことはしない、責任感が強い一方、ユーモアが無い、アイデアに飛躍が無い。リーダーシップを取りたがらない。」と我々日本人の共通性格を教えてくださいました。言葉が弱いと言う事もありますが、どうもそれだけではなさそうです。(7)

つまり民族の性格と言うものは、意識の底に沈んでいる無意識の中に、DNAなどで伝わっていると思われます。そうであるなら、現在の過剰消費型社会から抜け出して、新しい方向性を示すのに世界で最も適しているのは、自然との共生世界を 260 年も維持し、省資源文明を築いた江戸時代の遺伝子を持っている日本人ではないかと思います。現在の日本は長い時間をかけて出来上がった日本文明の遺産を急速に食いつぶしながら進んでいます。しかしその文明を支えてきた「遺伝子」はそんなに簡単に失われるものではありません。素直に「日本らしさ」を表に出して自信を持って日本型の経済社会、自然と共生して行く社会を作って行く事が、日本が世界に貢献する道だろうと考えています。そして早くそうしないと間に合わないのではないかと心配しています。 以上

コメントと感想

前にも書いたが、明治維新は江戸時代があったから実現したと小生は考えている。富士山の山頂は、あのなだらかな長い裾野があるから美しいのである。アジアの新興国が「維新」を起こしたいと願っても、江戸時代のような文化を経っていないから実現しないのである。「もったいない」という省資源文明、自然との共生を図る循環型社会、識字率の高さ、文学、絵画、演劇などの高い文化が有って、西歐化を急速に吸収し得たのである。

ロジャー・バルパース（註）著「もし、日本という国がなかったら」という本の最後に著者は「僕は 21 世紀の日本人には、まず日本を再デザインしてもらい、その結果として、世界を再デザインしてもらいたい。世界の明るい未来は、皆さんの国の文化にあるのです。あなた自身の明るい未来を開く鍵は、あなたがその文化にどう関わるかにあるのです。日本という国は世界にとって、無くてはならない必要な存在なのです。皆さんがそれを再び信じられるようになった時、日本は世界での居場所を取り戻すでしょう」と書いています。

しかし小生は、日本の文化が世界標準の方向性に大きく影響し、それに代替するとは思えない。現在世界を支配しているアングロサクソン文化は、他の文化の素晴らしさを認めたとしても、自分の文化を壊してその文化に替えようとする意思は無いし、歴史的に見てもそのような実例を見出し得ない。現在のイスラム教諸国との軋轢を見ても解かるであろう。一神教と多神教（自然を神と敬う）、自然に対する態度、打ち勝とうとするか共生するか、この違いは大きい。これからの日本の進むべき道は、日本という「ブランド」が世界から尊敬されることではなかろうか！その為には、日本というブランドを再デザインする必要がある。

（註）ロジャー・バルパース 1944 年アメリカ生まれ。ハーバード大学院ロシア研究所で修士号取得。その後、ワルシャワ大学とパリ大学へ留学を経て（8）

1967 年来日。約半世紀を日本で過ごす。作家、劇作家、演出家でもある。映画「明日への遺言」でテヘラン国際映画祭の脚本賞を受賞。また映画「戦場のメリクリスマス」の助監督を勤めた。**2008** 年第 **18** 回宮沢賢治賞を受賞した。

「もし、日本という国がなかったら」集英社 **2011** 年 **12** 月 **20** 日初版¥**1700**